

認識的不正義

飯塚理恵（関西大学）

本発表では認識的不正義をテーマに講演を行う。ミランダ・フリッカーの「認識的不正義」は 2007 年に出版されて以来、認識論研究に大きな影響を与えてきた。今や、欧米の大学の哲学専攻の学生で、認識的不正義について見聞きしたことがない者を探すのも難しいほどだ。この発表では三つのことを目標にしている。まず一つ目は、二つの認識的不正義がどのようなものなのかについての説明を与えることである。次に、認識的不正義の議論を、認識論・倫理学・フェミニスト哲学研究の流れの中に位置づけることである。最後に、認識的不正義出版後の議論の発展と、特に日本における応用の期待について述べることである。

認識的不正義とは認識主体に対してなされる不正であるが、それらには大きく二つの種類があると言われる。まず、「証言的不正義」と呼ばれる不正がある。わたしたちが、証言のやりとりを行う際、聞き手が、話し手のアイデンティティについて偏見的なステレオタイプを抱いてしまうせいで、聞き手の証言の信用性が不当に割り引かれてしまうことを指す。次に、「解釈的不正義」がある。これは、集団の解釈的資源内におけるアイデンティティに対する構造的偏見が原因で、ある人の社会的経験の重要な領域が、集団の理解から排除されてしまうという不正義のことである。まずは、こうした二者の認識的不正義のあり方、代表例を紹介し、二つの不正義を理解する上で共に重要となる偏見の働きに着目する。そして、それぞれの不正に対して、フリッカーが与えた徳ベースの解決法を見ていく。

次に、認識的不正義の概念が提唱される以前、または同時期に、フェミニスト哲学・倫理学・認識論で起きた変化に言及する。まず、哲学者が迫害や差別、偏見を中心的問題として取り組んできたのは、フェミニスト哲学においてだろう。権力構造のある社会に位置づけられた主体としての私たちという考えに触発され、政治的・倫理的問題を考察したシュクラーやテスマンの功績に言及しながら、徳から悪徳、正義から不正義への意識の転換について述べる。社会性への注目は知識の探求枠組みの改定を迫るものでもあった。つまり、知識の源泉として証言の重要性が叫ばれること（証言の認識論）、良い探求に必要な特性に注目すること（徳認識論）とに繋がった。そして、実際の社会の中に認識者が位置づけられることで、権力構造が諸個人の探求に与える影響の大きさにも気づかされていったのである。こうして各分野の変遷を概観することで、認識的不正義が単独で偶然生じた考えではなく、哲学研究の歴史の流れの中で必然的に生じたことを理解したい。

最後に、認識的不正義の理論的發展を検討する。フリッカーの認識的不正義への対処法は個人

2021 年度哲学若手研究者フォーラム テーマレクチャー
「現代認識論」講演要旨

による徳の涵養をベースとしていたが、この点についてアルコフ、アンダーソンらが批判を加えた。認識的不正義の克服のための複数のアプローチ（個人、教育、制度など）それぞれの利点と問題点を検討する。また、フリッカーの認識的不正義理解を超えて、信用性の超過を不正とするメディアーナの考えや、認識的不正のより深刻な形態「認識的消音」を説くドットソンの考察を通じて、認識的不正義研究の奥行きを見る。最後に、日本特有の認識的不正義のあり方を模索する。フリッカーが認識的不正義の中心的な諸問題の源泉であるとした偏見—様々な領域を通じて人々を追いかけてくるタイプの偏見—は、障がいを持つ者、性的マイノリティ、少数民族出身者や外国人などを苦しめる。そして、フリッカーの著作でも明らかなように、女性達がそうした不正義の被害を被ってきた。私は日本のリプロダクティブヘルス・ライツに関する情報の消費のされ方に注目したい。女性の性や生殖に関する経験や、そうした経験に基づく知識は解釈的に周縁化されており、そのため、女性の経験理解の試みには歪みが生じている。証言的不正義・解釈的不正義の両面から、現代の日本女性が被る認識的不正義の実態を探っていく。

文献案内

まずは、この発表の中心的话题であるフリッカーの著作が挙げられる。 Fricker, M. (2007) *Epistemic injustice: power and the ethics of knowing*. Oxford: Oxford University Press. フリッカーの認識的不正義の考えに対して様々な角度から疑問を投げかけるアルコフの論文は、このテーマの射程の広さを学ぶ為に有用だろう。Alcoff, L. M. (2010) 'Epistemic Identities', *Episteme*, 7(2), pp. 128–137. フリッカーと類似する視点として、抑圧的社会と倫理的な徳の関係をとり上げているテスマンの著作も興味深い。Tessman, L. (2005) *Burdened virtues: Virtue ethics for liberatory struggles*. New York: Oxford University Press.